

通りゃんせ！通りゃんせ！

千葉の県人 鎌田 留吉 平成25年5月9日

アベノミクスが叫ばれてから、急激な円安と株式の上昇が続いている。皆がハッピー！ハッピー！で何も悪いことはないではないかと声高に言う人が多い。金融機関が保有する株式も含み益になってきたし、資産効果から高額商品も売れ始めてきたようだ。都心部の高層マンションを、中国人と思しき外国人が一棟買いをしに来たとか聞く。年金の運用にも好影響であろうし、円安のおかげでトヨタを始めとする輸出企業もこの夏のボーナスは期待できるに違いない。またヨーロッパ等からの観光客も増えてきている。それに比べたら、輸入に頼らざるを得ない燃料費の高騰や食料価格の上昇など、大したデメリットではないというのである。

私も確かに、昨年までの日本の株式市場は安過ぎたのであろうし、その修正が行われるのは悪いことではないと思っている。特に停滞し、閉塞感に包まれていた人々のマインドが少しでも明るくなり、未来というようなものを見つめるようになってきたのは、喜ばしいことである。

しかし、と私の中の「蟠（わだかま）り」が、問いかける。

先ず、この円安によって現地生産を進めてきた企業群が日本に戻ってくるのではないかという淡い期待についてである。残念ながら、新興国における「地産・地消」というトレンドは、新興国に於ける権利意識の高まりや、雇用問題、燃料費の高騰、その他コストの構造問題からこの円安によっても大きく転換することはないのではなかろうか。

次に、現在先進国とされる国々が、低金利を強制され、それでは足りない為、お金をばら撒き続けている、「そもそも」の理由は何であっただろうかということだ。

それはそれぞれの「国」でそれぞれのバブルが弾けたことによる「経済の不安定化」つまり「景気の停滞」「失業率の増大」が招来したからではなかったか。不動産と株式を中心としたバブルは、それが膨らむ過程は一時的に多くの人々がハッピー！ハッピー！に酔いしれるのではある。しかしそれが弾けた後には悲惨な経済実態が待っているのだ。

ベアスマネーをジャブジャブにすることが、本来あるべき実態経済にお金が行くならばそれはよいのだが、1980年代後半の日本のように、或いは2000年代半ばのアメリカやスペインのように、不動産と株式を中心としたバブルを形成するという方向に流れ、それが弾けた時に起こる「経済の不安定化」は、上昇過程のメリットで償えるようなものでは決してない。スペインの4人に1人に職がなく、無為な朝を迎えざるを得ないという現実。一クラス50人の生徒のうち、4人の両親に職がないアメリカ。

今やバブル崩壊の事後処理の為、各国の財政に施す術がなく、中央銀行も不良債権の種を大量に培養している。また今度バブルが破裂したら、本当にもう打つ手はなくなる。行きは良い良い、帰りは怖い。